



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2689号 2015.10.26 発行

### 民間運営3年目に 「ひがしなり街道玉手箱」

大阪日日新聞 2015年10月26日

大阪市東成区全域で多様なイベントが催される「ひがしなり街道玉手箱」(同実行委員会主催)が11月3～8日に開催される。区の主導で行われていた前身イベントから運営体制を刷新して現イベント名になって3年目。区民が企画運営を担い、デザインや印刷も区内で完結。区民の手による、区民が主役の祭りだ。

パンフレット裏面のマップは11校下ごとに色分け。全校下にイベントマークが付き、竹村事務局長は「自然とつながっていった」と喜ぶ

「玉手箱」のルーツは、2007年に始まった「東成新道・暗越(くらがりごえ)奈良街道フォーラム」。区内を東西に走る暗越奈良街道にスポットを当て、講演会や町歩きなどを行っていた。12年から名称を変更し、各地域で独立して開催してきたイベントを集約して区全体の祭りとして再出発。そして、ことし初めて、区内全11校下でのイベントが実現した。



#### ■ “街道”のおかげ

神社でのアートやフォークコンサートなど、イベントは多種多様。以前から行われてきたものもあるが、多くは「玉手箱」をきっかけに誕生した。

それをつなぐのが、区民ボランティアによる運営事務局の存在だ。区は会場の使用申請などの行政事務が主な仕事で、各イベント企画者との調整は地域をよく知る事務局メンバーが行う。

また、ことしから運営費確保のため、法人や団体向けのクラブ会員制度が発足。年間1万2千円を支払うと、事務局が制作するマップやホームページに情報が掲載される。現時点で154団体から申し込みがあった。

「区民に良い町にしたい、という東成愛がある」と竹村朋子事務局長。自身は6年前に他区から転入してきた。「地域に住んだら受け入れてくれる。それこそ、街道のおかげ。人を受け入れる気質が残っている」と話す。

#### ■ ぎゅっと地域愛

今回の注目は、初日に区民センターで行われる「バリバリバリアフリー〜大阪チャチャチャ祭〜」。区内の「アトリエSUYO」を拠点に活動する障害者と健常者による「大阪チャチャチャバンド」のコンサートのほか、発達障害についての講演会を行う。また、独身男女が和服を着て茶道などの文化を通して出会う八阪神社での「ニッポン男子ニッポン女子の体験型婚活大作戦」、区内のモノづくり関連企業が集結した「ものフェス2015」(8日・区民センター)などがある。

期間中は特製Tシャツが参加証となるバルイベントを開催。Tシャツは3種類あり、区内在住のクリエイターが制作した。

市内で2番目に面積が小さく、高校と大学が唯一所在しない東成区。「すごい遺跡も目立つものも何もないが、そこが魅力。魅力は人です」と竹村事務局長。ぎゅっと凝縮した地

域愛を発信する。

詳細は「ひがしなり街道玉手箱」公式ホームページへ。

#### 性的少数者の就職支援 14社参加し説明会 大阪日日新聞 2015年10月26日

性的少数者（LGBT）を対象にした就職説明会が25日、大阪市淀川区の新大阪ブリックビルで開かれた。介護関連の14社が参加。約100人が来場し、事業所の担当者と熱心にやりとりしていた。



事業内容や職場環境について熱心にやりとりする企業関係者と来場者ら＝25日午後、大阪市淀川区の新大阪ブリックビル

日本の人口の7・6％がLGBTという民間調査がある中、トイレや更衣室の対応など企業側の体制が十分整っていないとされる。

LGBTを理由に不利益を被らないよう企業の体制整備を求める声を受け、介護関連事業所に詳しい笑美面（えみめん）（同市西区）が主催。介護業界では柔軟な対応が可能なケースは少なくないとして、理解のある事業所を集めた説明会を企画した。業界の人材不足にも対応する一石二鳥の効果を狙った。

会場では、更衣室やトイレ、名札など、企業側が対応可能な項目を明示。就職活動で「社内の受け入れ態勢が整っていない」と断られた経験がある性同一性障害の参加者（25）＝奈良市＝は「学生時代に今回の面接会があればありがたかった」と歓迎していた。

笑美面の榎並将志社長は「こうした機会を全国に広めていければ」と意欲を示していた。

#### 障害者総合支援法の見直し 一人暮らしを進め、グループホームは重度者向けに



福祉新聞 2015年10月26日 福祉新聞編集部  
関係機関を訪問する横浜市磯子区内の 自立生活アシスタント（左）

厚生労働省は15日、障害者総合支援法の見直しに関連し、グループホーム（GH）から一人暮らしへの移行を目指す人などを対象とした定期的な巡回訪問と随時に対応するサービスの創設を検討する考えを明らかにした。一方、GHは重度の人が暮らす場と位置づけ、軽度の人

は利用対象から外すことも視野に入れる。知的障害者、精神障害者の重度化・高齢化に対応できるよう、サービスを再編する。

同日の社会保障審議会障害者部会は、2016年通常国会への改正法案提出に向け、委員の意見を集約する段階に入った。これまで議論してきた論点のうち①常時介護を必要とする人への支援②移動支援③就労支援-について、厚労省が見直しの方向性を示した。

定期的な巡回訪問と随時に対応するサービスは「常時介護が必要な人」への対応策として浮上。GHで暮らす人の7割弱を占める知的障害者、2割を占める精神障害者のうち、軽度の人一人暮らしでできるよう支える。

専門のスタッフがアパート探しなど衣食住を支えるほか、日常的な健康管理、対人関係の調整などを担う。

横浜市の「自立生活アシスタント」（利用登録879人、支援事業者数38。2014年度実績）がその具体例という。

また、「地域生活支援拠点」（体験宿泊、緊急時の受け入れ、相談、コーディネート）の整備も加速させる。

GHには障害支援区分の軽い人が多いとの指摘があるが、厚労省は重度の人でも暮らせる場にしたい考え。軽度の人については一人暮らしできる体制を整えることを前提に、GHの利用対象者から外すことを模索する。

委員からは「軽度者を追い出すことありきではいけない」とクギを刺す声のほか、「横浜市はお金をかけすぎだ。過疎地で定期巡回をやるのは無理」といった意見が上がった。

生活支援拠点の整備も「賛成だが、国が誘導しないと普及しない。より実効性を伴うものにしてほしい」「重要なことだが、地方に丸投げの現状では絵に描いた餅だ」といった意見が上がった。

### 就労支援はメリハリ

移動支援は就労移行支援、障害児通所支援（いずれも個別給付）で通勤・通学の訓練を実施するよう誘導する。現在、通院の支援は個別給付の対象だが、通勤や長期にわたる外出の支援は対象外となっている。

就労支援の各サービスは一般就労への移行、工賃の向上が大原則だが、事業所によって内容、工賃、一般就労への移行率などにバラツキがある。厚労省は、障害者やその家族が適切に選択できるよう、事業所にそうした情報の公表を義務づける方向で検討する。

また、工賃や一般就労への移行率が高い事業所には障害報酬で高く評価するなどメリハリを付ける方針だ。

**ことば 自立生活アシスタント**＝横浜市が一人で暮らす知的障害者の在宅支援として2001年度から始めた事業。後に精神障害者、発達障害者、高次脳機能障害者を対象に追加した。

アシスタントは同市独自の拠点「地域活動ホーム」「生活支援センター」などに配置され、24時間体制で対応する。衣食住、健康管理、金銭管理、対人関係などに関する相談に応じる。利用料は原則無料。半年から1年ごとに個別支援計画を見直す。一拠点当たりの登録人数は25人、アシスタントは2人、事業費は年間約1000万円。障害者総合支援法の既存サービスには、この事業の機能と部分的に似たものがある。

**統合失調症、楽しく解説 札幌で福祉フォーラム** 北海道新聞 2015年10月26日  
笑いを交えて統合失調症について語る加賀谷さん（左）と松本さん



障害のある人が暮らしやすいまちづくりを目指す「福祉フォーラム」が25日、札幌市豊平区の区民センターで開かれた。テレビ番組などで活躍するお笑いコンビ「松本ハウス」が統合失調症について講演し、自分たちの経験を通して焦らずに病気と向き合うことが大切と訴えた。

同フォーラムは、札幌市自立支援協議会豊平区地域部会が年1回開いている。

松本ハウスはハウス加賀谷さんと松本キックさんが1991年に結成。加賀谷さんは、中学時代から「おまえは臭い」などの、統合失調症の症状の一つである幻聴が始まったという。芸人になってからも「命を狙われているという妄想が離れなかった」と話し、99年の活動休止に至る経緯を語った。

また、2009年の活動再開後は「失敗しながら少しずつできることを広げている」と説明し、活動再開までの10年を「長いか短いか分からないが、自分に必要な時間だった」と語った。松本さんも「自然の流れにまかせる感覚だった」と振り返った。笑いも交えたトークに会場の約200人は熱心に聞き入っていた。（井上雄一）

山口）平生に児童発達支援センター 栗林史子

朝日新聞 2015年10月26日

## センターで子どもたちが過ごす部屋＝平生町



自閉症や学習障害、注意欠陥多動性障害（ADHD）など、発達障害の子どもたちを支援する「児童発達支援センターゆう」が先月、平生町でスタートし、25日に開設記念会があった。

センターは未就学児が対象で、県内では6カ所目。現在は12人の児童が在籍

するが、将来的には50～60人を受け入れる。

入所する子どもたちは一般の保育所や幼稚園に通いながら、週に数回センターに通って専門的な療育を受ける。必要な支援を受けつつ、通常の保育所でも過ごすことで、障害のある子もない子も共に育てる「包括保育」を目指す。障害がある子は一般の保育所に通うことで、別の子の行動をまねて学ぶこともできるという。



## 1億4000万円回収不能に 兵庫の社会福祉法人「三翠会」 第三者委報告書、元理事ら刑事告訴も

産経新聞 2015年10月26日

兵庫県三田市の社会福祉法人「三翠会」で不適切な会計処理が行われ、約1億円が用途不明になっている問題で、法人が設置した第三者委員会（委員長＝藤原孝洋弁護士）は26日、理事長の夫である元理事らが資金を流用し2億円超の損害を法人に与えた、とする調査報告書を発表した。このうち1億4千万円が回収不能になっているという。

第三者委は、理事全員が引責辞任した上で、新たな経営陣が詐欺罪や私文書偽造・同行使の罪で元理事を告訴するよう要望した。

報告書によると、元理事は権限がないのに法人の銀行印を使用して口座から資金を引き出していた。また三田市内で進めていた高齢者住宅の建設工事を請け負った建設会社に架空の領収書を発行させるなどした。

元理事が工事代金にみせかけて法人外に流出した資金の総額は2億7130万円に上った。回収不能となった1億4千万円のうち、3450万円は流出先も分かっていないという。

兵庫県によると、三翠会は緊急の理事会を開き、対応を協議する方針。東前弥生理事長は「深くおわびする。改善方策を真剣に検討し、三田市に報告したい」とのコメントを出した。

## 難病の子の介護 24時間体制でサポート

河北新報 2015年10月26日

### 難病の子どもの家族介護を支える「あっと名取」

在宅で常時医療ケアが必要な難病の子どもを一時的に預けられる小児生活支援センター「あっと名取」が25日、宮城県名取市下増田にオープンした。日本財団が日本歯科医師会の協賛で取り組む「トゥースフェアリー プロジェクト」の一環で整備された。

「あっと名取」は、医療・福祉の両面から24時間体制で子どもと家族をサポートする「レスパイトケア施設」。子どもには遊びを通したリハビリなどの時間を、介護を続ける家族には一時的な休息を提供する。

2台のトレーラーハウスを利用した施設で、サービススペース、厨房（ちゅうぼう）、ト



イレ、浴室を備える。0～18歳の難病児を受け入れ、年間約2400人の利用を予定。運営は社会福祉法人「むそう」（愛知県半田市）が担う。

開所式には歯科医師会や行政、福祉の関係者ら約40人が出席。記念植樹などを行って開所を祝った。「むそう」の戸枝陽基理事長は「東日本大震災の被災地では、難病の子ども家族介護が難しいケースも顕在化している。困りごとや地域のニーズに丁寧に応えていきたい」と話した。

「トゥースフェアリー プロジェクト」は2009年6月にスタート。歯科治療や入れ歯に使う金属をプロジェクトに賛同する歯科医の協力で集め、リサイクルで得た寄付金を社会貢献活動に充てている。

連絡先は、あっと名取022（384）2214。

## 来月1日に高校生介護技術の全国大会 伊勢崎興陽高が2年連続出場



東京新聞 2015年10月26日  
大会に向けて意気込む（右から）高橋さん、阪田さん、木村さん＝伊勢崎市の伊勢崎興陽高校で

11月1日に三重県伊勢市で開かれる「第4回全国高校生介護技術コンテスト」に、伊勢崎市の伊勢崎興陽高の女子生徒3人が関東ブロック代表として出場する。同高の出場は2年連続。持ち前の明るさを生かし、入賞を目指して毎日練習に励んでいる。（原田晋也）

「上半身を私の方へ動かせますか」「せーの、で動かしましょう」。同高の一室。ともに福祉系列二年で十七歳の阪田理帆さんと高橋彩乃さんが、介護利用者役の生徒の体に優しく手を添え、ベッドからの起き上がりを助けている。

利用者役がつえを使って歩き出すと「スムーズになりましたね」と褒めた。介護中も積極的に話し掛け、歌ったり、冗談を言ったりして笑顔を絶やさない。

コンテストは高校生が二人一組になり、体が不自由な利用者役の介護を七分間実演して技術を競う。二人は同二年で補欠の木村沙也加さん（17）とともに県大会を突破し、八月の関東大会でも四県から出場した六校の中で最優秀に輝いた。

コンテストでは、例えば「利用者はカーディガンを裏返しに着てベッドに座っている。これから面会に来る娘さんと外出するので、身だしなみを整えて居室入り口まで移動するまでの介助をしてください」などの課題が出る。

地域別の大会では課題と、利用者役の設定が幅広く事前に知らされるため、細かな動作まで作り込んで本番に備えてきた。

しかし、全国大会は事前に課題は分からず、一カ月前に知らされるのは利用者役の年齢や要介護度、趣味などの設定のみ。当日の競技二十五分前になって初めて課題が与えられる。別室で先生を除く三人だけで介護方法を考える必要があり、さまざまな状況に対応できる実力が試される。

高橋さんは「排せつや食事などいろいろな場面を想定して介護方法を考えているので、不安だけど自分たちの力を試したい」と自信をのぞかせる。

三人は授業の一環で週に一日、県内の介護施設で実習してきた。現場で働く職員に技術面の細かな助言を受けたり、利用者から体が不自由な生活で日々感じることを聞き取ったりしている。

同高では二年から系列が分かれ、三人は専門教育学を受け始めてまだ一年に満たない。ただ、福祉系列長の中山見知子教諭は三人を「優秀で、指導したことをスポンジが水を吸うように吸収してそれ以上の結果を出してくる」と評価し、「チャレンジすれば必ず結果を残してくれると思う」と期待する。

高橋さんは「知識がないなりに勉強して、私たちなりの介助をしたい」と、阪田さんは「明るく笑顔で介助して、入賞したい」と意気込んでいる。

### 郷土料理でもてなし、田辺と上富田の3会場 紀の国わかやま大会



紀伊民報 2015年10月26日  
牛汁の振る舞いをする大塔生活研究グループのメンバーら（25日、和歌山県田辺市上の山1丁目で）

全国障害者スポーツ大会「紀の国わかやま大会」が開かれた和歌山県田辺市と上富田町の3会場では25日、選手や来場者らに茶がゆなど郷土料理が振る舞われた。いずれも列ができるほど好評で、地域色豊かな心温まる料理に選手らは喜んだ。

### 熱戦 紀南勢も活躍 紀の国わかやま国体

紀伊民報 2015年10月26日  
熱戦が繰り広げられた陸上競技（和歌山市で）

全国障害者スポーツ大会（紀の国わかやま大会）が24日開幕し、26日まで県内各地で正式13競技とオープン2競技があった。陸上競技で田辺市紺屋町の廣畑賢さん（44）が車いす40歳以上の部の50メートルとスラロームで1位になるなど、紀南勢も活躍を見せた。



皇太子さま 田辺へ、ボランティアに笑顔 バスケット観戦 紀伊民報 2015年10月26日  
大会運営ボランティア（右）に声を掛けられる皇太子さま＝和歌山県田辺市上の山1丁目の田辺スポーツパーク体育館で



皇太子さまは24日、和歌山県田辺市上の山1丁目の田辺スポーツパーク体育館であった第15回全国障害者スポーツ大会（紀の国わかやま大会）のバスケットボール競技を観戦された。大会を支えるボランティアとの交流の際は「頑張ってください」と笑顔で声を掛けられた。同日午後、白浜町の南紀白浜空港から帰京された。

県勢、連日のメダルラッシュ わかやま大会第2日 岩手日報 2015年10月26日

【和歌山県で本社取材班】第15回全国障害者スポーツ大会「2015紀の国わかやま大会」第2日は25日、14競技（オープン競技を含む）を行い、県勢は陸上の北村大吾（盛岡峰南高等支援学校2年）が知的障害者少年男子800メートルと1500メートルの2種目を制すなど3競技で7個の金メダルを獲得した。同日の銀メダルは7個、銅が5個で、2日間通算では金13、銀12、銅7となった。

水泳の村田奈々（釜石市教委）は肢体不自由者女子1部50メートル自由形で自身の大会記録を更新する36秒36で優勝。前日の25メートル自由形と合わせ、2年連続の2冠となった。フライングディスクでは国谷（くにや）朋哲（ともあき）（花巻清風支援学校高等部2年）が飛距離を競う男子ディスタンス（立位）で56メートル01の自己ベストで1位となった。

陸上は北村のほか、肢体不自由者男子2部砲丸投げの猪狩耕一（盛岡市）、同男子1部ジャベリックスローの佐々木烈弥（れつや）（宮古商高1年）、同女子1部1500メートルの菊池美香（北上・北萩寮（ほくしゅうりょう））の3人が金メダルだった。卓球（サウンドテーブルテニスを含む）は2日間のリーグ戦を終え、2位が2人、3位が3人だった。

バレーボール（聴覚障害女子）の岩手は初戦の準決勝で兵庫に0－2で敗れ、26日の3位決定戦に回った。

#### <全国障害者スポーツ大会>フットベース 静岡県初V 静岡新聞 2015年10月26日



メダルを胸にする笑顔の選手ら＝和歌山県の紀の川市粉河運動場

東京の3連覇を阻み、知的障害者フットベースボールで本県が悲願の初優勝を遂げた。最終回となる四回裏に匂坂進吾（24）＝藤枝市＝の一撃でサヨナラ勝ちし、選手たちは喜びを爆発させた。

「とにかく1点でいいから取りたいという思いでいっぱいだった」と匂坂。昨年は決勝で惜敗した強敵を前に、「みんなで心一つにしてやろう」と前向きな姿勢を崩さなかった。

県選抜は高校生から27歳までの社会人選手でつくる。月に1度の練習では、打倒東京を目標に、相手チームの投手を想定した練習も重ねてきた。メンバーをまとめてきた桜田翔主将（21）＝静岡市＝は「仲間がいたからこそまでこられた。本当にうれしい」と声を弾ませた。川上健治監督（44）＝同市＝も「劣勢でも、みんな声がよく出ていた。よくやってくれた」とナインの奮闘をねぎらった。

#### ハロウィーン 思い思いに仮装 川崎の風物詩に2300人練り歩く



東京新聞 2015年10月26日

思い思いの仮装でパレードする参加者ら＝川崎市川崎区で

国内最大級の規模を誇る仮装パレード「カワサキ ハロウィーン」が二十五日、川崎区の川崎駅東口周辺で行われ、思い思いの仮装をした約二千三百人が駅前的大通りなど約一・五キロを練り歩いた。沿道の人出は約十二万人（主催者発表）だった。

今年で十九回目を数える川崎の風物詩。パレードの最後尾からは、就労体験として参加した障害者や、ごみ拾いボランティアのNPO法人グリーンバードのメンバーが、沿道のごみを拾いながら大規模なイベントの一端を支えた。

障害者の就労体験は、心のバリアフリーを提唱するNPO法人ピープルデザイン研究所と市の共同企画。市内五つの施設から十一人が参加した。就労移行支援事業所「ウイングル川崎センター」（川崎区）の男性（23）は、パレード参加者の衣装から落ちたとみられる飾りを拾ったという。働く自信を持ってもらう機会でもあり、交通費として一人二千元が支給された。

同事業所から参加した別の男性参加者（18）は「パレード中にごみを拾っていたら、沿道の女性から『頑張ってるね』と声を掛けられてうれしかった」と充実感を漂わせた。別の男性参加者（39）は「みんなの仮装が楽しかった。次は自分もメイクして参加したい」と話していた。（上條憲也）

#### 無意識に視線追う脳の部位特定 京大、自閉症治療に期待 共同通信 2015年10月26日

無意識に他人の視線を追う時に活動する脳の部位を、京都大医学研究科の佐藤弥（わたる）准教授（脳科学）らの研究グループが解明した。視線を介したコミュニケーションに障害があるとされる自閉症の原因解明につながるという。9月中旬に米科学誌で発表した。

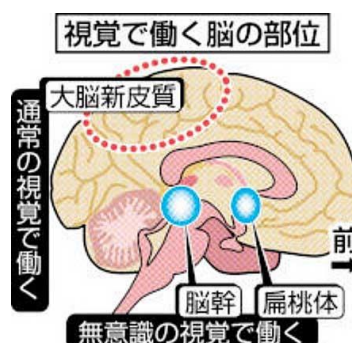
人が無意識に他人の視線を追うことは分かっていたが、脳内メカニズムは不明だった。

実験は20代の男女27人が対象。無意識に他人の視線を追った時の反応を調べるため、視線を被験者へまっすぐ向けるか、左右のどちらかにそらしている3種類の人の画像を、意識できない短時間だけ各被験者へ提示。「機能的磁気共鳴画像装置」(fMRI)を使って脳で血流量が増えて活性化した部位を観測した。

その結果、左右に視線をそらしている画像を示された時だけ、被験者の脳幹や扁桃(へんとう)体が活発に活動した、という。

脳幹や扁桃体は多くの動物に共通してあり、進化の過程では「古い脳」とされる。一方、通常の視覚認知では「新しい脳」である大脳新皮質が主に活動していることが分かっている。

佐藤准教授は「自閉症の人でも、視線を処理する時の脳の働きを解明したい。病変部位が分かれば、治療法開発にも期待できる」としている。



### 社説：【災害と個人情報】人命優先で公表考えたい

高知新聞 2015年10月26日

9月に発生した関東・東北豪雨は防災や災害対応などに多くの教訓を残したが、行方不明者の情報の取り扱いもその一つとあってよい。

茨城県常総市では鬼怒川の堤防が決壊し、大規模な水害に見舞われた。市は当初、連絡がつかない人を「行方不明者15人」などと発表していたが、3日後になって突然、全員の無事を確認したことを公表した。それ自体は朗報ではある。だが、無事が確認されるまでの間、警察や消防隊員らが大掛かりな捜索活動に当たっていた。関係者をはじめ、多くの人が驚いたに違いない。混乱の主な原因は、市が行方不明とした人の氏名を公表しなかったことにあるようだ。もし公表していれば、本人や家族からの連絡など多くの情報が集まり、安否確認がもっと早くできた可能性がある。

市は非公表の理由に個人情報の保護を挙げている。市の個人情報保護条例が本人の同意なしに情報の外部提供を禁じているように、行政が保有する個人情報は厳格な管理が求められることは言うまでもない。

ただし、個人情報保護法や市の条例は例外規定も設けている。災害などを想定して、生命や身体、財産を保護するために必要な場合には本人の同意を得ずに情報提供できる、とする。

この例外規定を適用するかどうかは地方自治体の判断に委ねられる。近年の災害をみても、安否確認などのために氏名を公表した自治体がある一方、プライバシー保護を優先させた自治体もあり、判断は分かれている。

災害と個人情報をめぐっては、東日本大震災を受けた災害対策基本法の改正によって、避難に支援が必要な高齢者や障害者ら災害弱者の名簿作成が全市町村に義務付けられた。自治体が十分な管理を前提に、その名簿を自治会や自主防災組織などに提供しているのは人命を優先するためだ。

常総市のケースについても、専門家からは「人命を優先すべきだ」といった指摘が出ている。安否の早期確認や捜索活動のために、氏名の公表を基本にした対応を考えていく必要があるのではないかな。

個人情報が関わるだけに住民の理解が大前提となるが、各自治体は災害時の個人情報提供の在り方を具体的に検討してもらいたい。国も方向性を考えることが求められる。

月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も  
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行

